

萬葉における表現と形式

—願望・疑問・希求・命令表現について—

白 藤 禮 幸

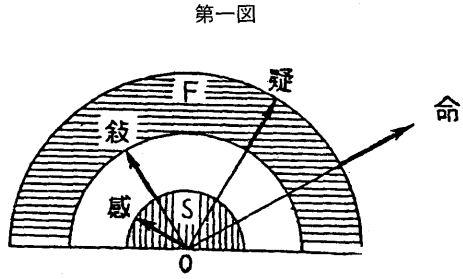
一

「うた」を詠むということは言語活動の一態である。一般の発話と同じく、「こえ」を連ねて語となし、統語法のもとに形を整えて表出される。異なる点は、歌には音数律があり、恐らく何らかの旋律があつたということであろう。このような行動をとるのは、言語主体（作者）にある意図があつてのことである。何かについて表現したい、という欲求があつてのことである。

阪倉篤義氏は、「表現」という語について、「話し手の意識・情意をふくめて、それをあらはすべき形式」と規定された。話し手は歌の場合、詠み手である。作者がどのような意図をもって、どのような気持ちを伝えようとしたのか、

歌の解釈もつまりはその形式によってなされる。作者の情意・意識にはどのようなものがあるのか、これを話し手の相手への働きかけの強さの差、要求の程度差として、ベクトルの長さの差として定義されたものに、宮地裕氏の次の図がある。

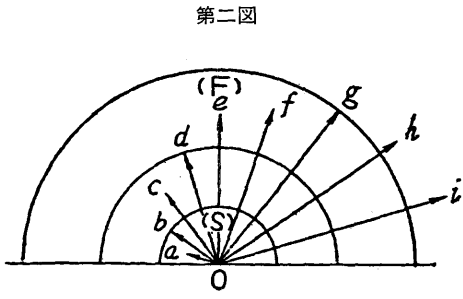
第一図は文の性質の種類であり、感動文・平叙文・疑問文・命令文の四分類がなされている。第二図は話し手の意図によって、ベクトルの大きさの差として示されたものである。（宮地先生には著書『文論』があり、そこではコミュニケーションの成立・展開内容について、二人の人が出会い、立ち去るまでの対話の進行と内容を構造的に分析・分類されているが、詠歌という、一首の短い形式には対話という進行はなく、一人の作者の、多くは一つの文で完結



O 點は主聲
 S 半圓は相手の言語活動意識
 F 圓形は相手の言語活動意識

するものでは、表現意図の分析で十分であろう。(第二図はより詳しくその表現意図が分類提示されている。a 歎声は恐らく、間投詞(感動詞)の形で思わず口から発せられるものであろう。それ故に、主体としては無意識のうちには発せられるもので、特に他の誰かに向けての表現というのではなく、いわゆる時枝文法という辞の最も辞たるものがある。ただし、間投詞の中には、他への呼び掛けのものもあり、すべてが非伝達という訳ではない。

我々の認識は、このことばに置き換えることになされる。



a	b	c	d	e	f	g	h	i
歎	感	推	紋	念をおす	反	疑問	勸	命
聲	動	量	述		語		誘	令

O、S、Fは前と同じ

そのものの名を言うことが最も普通の認識である。それは平叙文という形になる。その対象が主体の認識を越えるものであったならば、即ちそのものを言葉で説明できないものであれば、最も直接的には予想を越えたものとして感動を生み、その対象に省察を加えれば推量表現となり、更にその対象の究明に進めば、疑問表現となる。このように見れば、認識が未成立という点を共有して感動文と推量文と疑問文は連続するといえる。感動文は主体の中で完結するもので聞き手の存在は必要としない。いわゆる喚体句、述

語を欠いた形で終わる名詞文、また、「かも」「かな」といった助詞で結ぶ形で表現されるものである。推量表現は多く助動詞によつて表現される。文語文法には未然形接続と終止形接続の多くの推量の助動詞があり、連用形接続の「けむ」もある。その使い分けの多様さは、古典の世界における推量表現の位置の重さを反映するものであろう。

疑問表現は何らかの言語上の反応(答え)を期待するものであるが、その関係は単純ではない。ふと自問するがごとく、口から発したものの、疑問文の形式はとるが、実は答えは当初から話し手の中には決つており、聞き手の答えはまったく期待しない反語もある。必ずしも常に話し手に対して言語的反應を期待されている聞き手がいる訳ではない。殊更、歌の場にあつては、話し手と聞き手の関係を前提とするのは相聞がそれに近い、ということであつて、両者の関係がいつもそこにある訳ではない。しかし、歌の場においては、このような疑問表現も成立する何ものかがあるということであらうか。

先の第二図で、ベクトルが相手の言動活動意識を貫いて、相手に強く働きかけるものに、勸誘・命令があつた。これは相手に対して、身体的行動をも要求する、という意味である。命令は相手にある特定の行動をとることを、禁止はその行動をとらないことを要求するものであり、希求は、

そのことを相手に願うものである。願望は話し手(作者)の願いを一方的に表明したに過ぎないものであつて、相手に対する働きかけ・拘束力は極めて低いもの、と考えられる。

即ち、本論で取り上げようとした疑問・希求・命令(禁止)表現は、相手に対して、言語的乃至は行動的反應を期待する表現、ということになる。また、部立てとの関係において捉えようとするのは、部立てが、古代の人が考えた、作歌の目的・内容・意識の現れであり、それと言語形式の相聞を探らうと考えるからである。(テキストは稲岡耕二『萬葉集一・二・三』(和歌文学大系)明治書院を用いた。)

二

願望・希求表現の形式としては、主なものには次のものがある。³⁾

a 未然形十ナ(二・ネ・ナム・ナモ)

潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

(一・一八)

つらつらに見つつ偲はな

(一・五四)

なほなほに家に帰りて業をしまさに

(五・八〇一)

ありきぬの辺つきて漕がに

(九・一六八九)

小松が下の草を刈らさぬ

(二・一一)

恋痛き吾が背いで通ひ来ぬ

(一・一三〇)

月夜は(略)夜長くあらなむ

(七・一〇七二)

吾妹児は鉏にあらなむ

(九・一七六六)

雲だにも情あらなむ

(一・一八)

川路にも児らは逢はなむ

(一四・三四〇五)

右のうち、第一例は額田王の歌であるが、これは船子に對する希求と解されるが、第二例は「偲ぼうではないか」と解釈されているように願望からきた誘いかけである。

「なむ」「なも」の例も、前者は希求、後者は作者の願望の例である。このように、願望と希求は形式的に截然と区別できる、というのではないようである。

また、これらの未然形にナ系の形が付くという形式から打消系の語が連想される。まだないから願望・希求するのであり、未然形はそのことを表わす形である。打消が願いと結びつくのは、次のヌカと繋がる。

bヌカ

吾が命も常にあらぬか

(三・三三二)

ひさかたの雨も降らぬか

(四・五二〇)

庭むことなくありこせぬかも

(二・一一九)

三笠の山に月も出でぬかも

(一〇・一八八七)

第一例は願望、以下は雨・芳野川・月に対する希求の例である。

cホシ(欲)・ホリ

これは形容詞ホシ、動詞ホルを用いて形式化し欲求を直接に表現するものである。「くホシ」「くガホシ」「くマクホシ」「くマクホル」などがある。

見まくの欲しき君にもあるかも

(四・五八四)

明日さへ見まく欲しき君かも

(六・一〇一四)

山見れば山も見がほし

(六・一〇四七)

ありがほし住みよき里の荒るらく惜しも

(六・一〇五九)

手枕まきて寝まく欲りこそ

(二・二八四四)

「まく欲し」は次代の助動詞「まほし」へ続くものであるが、上代にあつては「く語法十ほし」と見るべきである。ただこのように並べると、単独の形容詞「ほし」、動詞「ほる」とはどう区別するか悩ましくなり、動詞「ねがふ」の類も入れていいか迷ってくる。しかし、これらの動詞・形容詞は詞であつて、客観的に述べたもので、心情の表現というのとは別であろう。

d連用形十コソ

今夜の月夜さやに照りこそ

(一・一五)

湍にはならずて溯にしありこそ

(三・三三五)

君が枕は夢に見えこそ

(四・六一五)

花咲きたらば我に告げこそ

(七・一二四八)

その他、その範圍にも四〇余の例があるが、上に来る語には「見え」「告げ」「あり」などが多い。この「コソ」は文末に来て希求を表すもの、上が連用形であることからすれば下の「コソ」はもと用言(動詞)であつた可能性がある。禁止の「なくそ」の「そ」がサ変の古い命令形である可能性が論じられるように「コソ」も「コス」の命令形であつたのかも知れない。しかし、オ段の命令形が衰えて、命令ではなく、希求の形式になつたのであろう。

e モガ

伊勢の海の沖つ白浪花にもが

(三・三〇六)

石戸破る手力もがも

(三・四一九)

万代にかくしもがもと憑めりし

(三・四七八)

見む人もがも

(五・八五二)

「くモガ」「くニモガ」は主として体言に付く形であるが、

来る路は石踏む山は無くもがも

(一一・二四二)

は用言に付いた例である。

f テシカ

山のはにいさよふ月を外に見てしか

(三・三九三)

竜の馬も今も得てしか

(五・八〇六)

あまた宿もい寝てしかも

(八・一五二)

水沫に浮かぶ細砂にも吾はなりてしか

(一一・二七三四)
願望を表わす形であるが、「テシカ」を「テ+シ+カ」と分解するか、「テ+シカ」と分解するか、今は不明である。

g イツシカ

何時しかと吾が念ふ妹に今夜逢へるかも

(四・五二三)

何時しかと吾が待つ月も早も照らぬか

(七・一三七四)

君を何時しか往きて早見む

(八・一四二八)

何時しかと吾が待ち恋ひし君を来ませる

(八・一五二三)

何時しかも此の夜の明けむ

(一〇・一八七三)

その他「何時しかと吾が待つ今夜」(二〇・二〇九二)、

「何時しかと吾が待ち居れば」(一三・三三四四)の例を含めて「いつしかと待つ」の形のものが四例ある。引用の

助詞「と」があるものは「いつしか……」とある文の略であらう。「しか」は f 「てしか」と共通しており、何かありそうである。

h イツカ……ム

角の松原いつかさむ

(三・二七九)

清き瀬を馬うち渡し何時か通はむ

(四・七一五)

何時かも見むと念へる吾を

(一一・二四〇八)

妹が家に何時か至らむ

(一四・三四四一)

本来は疑問を表わす形であるが、その時を待ちかねる氣持が、願望に転じていったものである。しかし、同じ形でも、なお依然として疑問文として解されるものもある。

三

疑問表現については、注2に挙げた論文において宮地氏はその種類を、

説明要求の疑問文(疑問詞を伴うもの)

判定要求の疑問文(右以外)

の二つに分類した。これに対し阪倉氏は右に

選択要求の疑問文

を加え、三類とされた。疑問は、言語主体がそれと認識できないことがもととなる。一人の人間が、それも古代社会において、経験・目撃できることは極めて僅かである。過去の事も勿論であるが(き・けり・けむの世界)、現在も、今自分の居る所以外のことには「らむ」で推量するしかないし、ましてやまだ至っていない未来のことは、想像するしかない。疑問表現の文に推量の助動詞が多く用いられているのはその現れであろう。

疑問表現の形式としては、疑問詞と助詞カ(カモ)・ヤ

(ヤモ)がある。その選択組合せで文が組み立てられる。

説明要求の疑問表現は疑問詞を持つものをいう。疑問詞の指し示すことがらについて、言葉で説明するものをいう。疑問詞と疑問の助詞「か」「や」がある場合は結びつき、更に推量の助動詞などが応じるなど、その形式は様々である。今、疑問詞の異なり語ごとに、集中初出の例を列挙する。

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに
(二・一六三)

つれもなき佐太の岡辺に帰り居ば島の御橋に誰か住まはむ
(二・一八七)

玉かづら花のみ咲きて成らずあるは誰が恋にあらめ吾は恋ひ念ふを
(二・一〇二)

海の底沖つ白波立田山何時か越えなむ妹があたり見む
(一・八三)

はつはつに人を相見ていかならむいづれの日にかまた外に見む
(四・七〇一)

吾が背子は何処行くらむ沖つ藻の隠の山を今日か越ゆらむ
(一・四三)

たらちしの母が目見ずておほほしくいづち向きてか我が別るらむ
(五・八八七)

植多竹の本さへとよみ出でて去なばいづし向きてか妹

が歎かむ (一四・三四七四)

磯の上に根這ふ室の木見し人をいづらと問はば語り告

げむか (三・四四八)

大き海をさもらふ水門事しあらばいづへゆ君は吾を率

しのがむ (七・一三〇八)

多由比潟潮満ち渡るいづゆかもかなしき背ろが我がり

通はむ (一四・三五四九)

白浪の浜松が枝の手向草幾代までにか年の経ぬらむ

(一・三三四)

吾背児と二人見ませばいくばくか此の零る雪のうれし

からまし (八・一六五八)

二人行けど去き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越

ゆらむ (二・一〇六)

幸ひのいかなる人が黒髪くろかみの白くなるまで妹が声を聞く

(七・一四一一)

はつはつに人を相見ていかならむいづれの日にまた

外に見む (四・七〇一)

行く船を振り留みかねいかばかり恋しくありけむ松浦

佐欲姫 (五・八七五)

いかさまに念ほしめせか(略) 大津の宮に天の下知ら

しめしけむ (一・二九)

…しじに生ひたる莫告藻もくごそうがなかも妹いもうとに告らず来にけ

む (四・五〇九)

一日には千重浪しきに念へどもなぞ其の玉の手に巻き

がたき (三・四〇九)

潮舟の置かればかなしき寝つれば人言繁し汝をどかも

しむ (一四・三五五六)

我が背子をあどかも言はむ武蔵野のうけらが花の時無

きものを (一四・三三七九)

足柄のままの小菅の菅枕あぜかまかさむ見ろせ手枕

(一四・三三六九)

右の他に「イクダ」(二三五・八〇四・二〇二三)は下

に打消の「あらねば」を置く不定詞の例であり、調査対象

外であるが、「年月もいくらもあらぬに(一七・三九六

二)の不定詞「イクラ」がある。

疑問詞に関する注意すべきこととして、助詞「ヤ」と共

存する場合の構造がある。

ここにありて筑紫つくしやいづち白雲しらくもの棚たなく山やまの方にしあ

るらし (四・五七四)

此間にありて春日はるやいづち雨あめつつみ出でて行かねば恋

ひつつそ居る (八・一五七〇)

ほととぎす来鳴きとよもす橘たちばなの花散る庭を見む人や誰

あらたまの年の経往けばあどもふと夜渡る吾を問ふ人

(二〇・一九六八)

や誰

(一〇・二一四〇)

右の例のように、助詞「ヤ」は疑問詞より前にある。対して、助詞「か」の場合は疑問詞より後にくる。これは、疑問点が、「か」の場合はその上に、「ヤ」の場合はその下に來るといふことである。その点から見れば、

相見ずて日長くなりぬこのころはいかに好去やいふか
し吾妹 (四・六四八)

の歌は、「いかに。さきくや。いふかし。吾妹」と文としては切れていると見るべきである。「さきくや」の「や」は文末終助詞ではない。「や」の終助詞的用法の場合は終止形に付くのが原則であり、「さきく」と連用形であるのは、下にその修飾すべき語が省略されたもの、と見られるからである。

阪倉氏が立てた選択要求の疑問表現は、英語の *or* を持つ文に相当するもので、対照的な二つの事柄を挙げ、そのいずれかを問うものである。多くは対句的構造を持つが、簡略化したものもある。これは判定要求のものを二つ重ねたもので、説明要求のものでは選択要求に使えない。

相見ては千歳や去ぬる否をかも我や然念ふ君待ち難に

(一一・二五三九)

筑波嶺に雪かも降らる否をかなしき児ろが布乾さ

るかも (一四・三三五一)

相見ては千年や去ぬるいなをかも我や然思ふ君待ちが
てに (一四・三四七〇)

の例の「いなをかも」が *or* に相当するもので、第一例は「千歳や去ぬる、我や然念ふ」、第二例は「雪かも降らる、かなしき児ろが布乾さるかも」、第三例は「千年や去ぬる、我や然思ふ」の選択要求である。第一・三例は対句的であるが、第二例は少し崩れている。

吾妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ国遠みか
も (一・四四)

大和の見えぬは「山を高みかも」、または「国遠みかも」と問う。

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか
待たむ (二・八五)

：宜しき君が朝宮を忘れ賜ふや夕宮を背き賜ふやうつ
そみと念ひし時： (二・一九六)

浪高し如何に梶取り水鳥の浮宿やすべき猶や傍ぐべき
(七・一二三五)

狂言かおよづれ言かこもりくの泊瀬の山に廬りせりと
いふ (七・一四〇八)

夢にだに何かも見えぬ見ゆれども吾かも迷ふ恋の茂き
に (一一・二五九五)

紅の欄引く道の中に置きて妾や通はむ君や来まさむ

(一一・二六五五)

右の例は対句構造が整つたものである。次の例は構造が崩れているが、選択要求と見るべきものである。

河の瀬の激ちを見れば玉かも散り乱れたる川の常かも

(九・一六八五)

ほととぎす今朝の朝明に鳴きつるは君聞きけむか朝眠

か寝けむ

(二〇・一九四九)

判定要求は、助詞カ(カモ)・ヤ(ヤモ)が係助詞又は終助詞として含まれたものである。

○カ(カモ)

くしろつく手節の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るら

むむ

(一・四一)

高田の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人な

しに

(二・二三一一)

倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光乏しき

(三・二九〇)

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつ

る

(三・二七六)

夢にだに見ずありしものをおほほしく宮出もするか佐

日の隈廻を

(二・一七五)

うはへなき妹にもあるかもかくばかり人の情を尽くさ

く念へば

(四・六九二)

時はしも何時もあらむを情いたくい去く吾妹か若子を

置きて

(三・四六七)

大夫の思ひわびつつ度まねく嘆く嘆きを負はぬものか

も

(四・六四六)

○ヤ(ヤモ)

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜もわが独り

寝む

(一・七四)

大夫の心は無くて秋萩の恋のみにやもなづみてありな

む

(一〇・二二二二)

古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし吾が念へるこ

と

(二・一一二二)

ほととぎす鳴く峰の上の卯の花の厭き事あれや君が来

まさぬ

(八・一五〇一)

明日香川明日だに見むと思へやも吾が大君の御名忘れ

せぬ

(二・一九八)

燃ゆる火も取りてつつみて袋には入ると言はずや逢は

む日招くも

(二・一六〇)

あしひきの山の常陰に鳴く鹿の声聞かすやも山田守ら

す児

(二〇・二一五六)

「か・や」の係助詞用法の例と終助詞用法の典型例を挙げた。両者の相違としては、終助詞的用法の場合、「か」は連体形に、「や」は終止形に付くという点、「や」の方には

已然形に付いて、その理由の下に結びの結果が来るという用法があることである。後者の例は、結びが無くなると反語表現の最も一般的な型となる。

も
紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに吾恋ひめや
(一・二二一)

や
大伴の御津の浜にある忘れ貝家にある妹を忘れて念へ
(二・六八)

四

命令・禁止表現については、特に命令表現は命令形でもって表わされるので、形式上の問題は無い。禁止表現の形式は、

ナソソ

秋山に落つる黄葉しましくはな散りまがひそ妹があたり見む
(二・一三七)

馬ないたく打ちてな行きそ日ならべて見てもわが帰く
志賀にあらなくに
(三・二六三)

この形が基本で最も多い。

ナソソネ

も
難波渦潮干なありそね沈みにし妹が光儀を見まく苦し
(二・二二九)

佐保河の岸のつかさの柴な刈りそね在りつつも春し来

ナソ

らば立ち隠るがね
(四・五二九)

吾が大君物な思ほしすめ神の副へて賜へる吾がなけなくに
(一・七七)

吾が船は比良のみなとに漕ぎ泊てむ沖へな離りき夜ふけにけり
(三・二七四)

ソナ

あをによし奈良の家には万代に吾も通はむ忘ると念ふな
(一・八〇)

家思ふと情進むな風守り好くしていませ荒しその道
(三・三八一)

ソナユメ

吾妹子を早見浜風倭なる吾を待つ椿吹かずあるなゆめ
(一・七三)

葦北の野坂の浦ゆ船出して水島に去かむ浪立つなゆめ
(三・二四六)

形式的には禁止表現は以上の五形に収まる。「ソコトナカレ」「ソザレ」といった訓詁系の表現は歌の中にはないようである。

命令も含めて、問題としては、敬語との関わりがあるようである。

天地の神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで

(四・五四九)

右は、神に向つて無敬語で「助けよ」と言つたものである。勿論、敬語を伴つたものもある。先に「ナ」の形の所に挙げた卷一・七七番歌の例は大君に対し「思ほす」と敬語動詞を使つてゐるものである。

鈴が音の駅家の堤井の水をたまへな妹が直手よ

(一四・三四三九)

…寒き夜をいこふことなく通ひつづ作れる家に千代までにいませ大君よ…

(一・七九)

風吹きて河浪起らぬ引き船に渡りも来ませ夜のふけぬ間に

(一〇・二〇五四)

玉垂の小簀の垂簾を往きかちに寐はなさずとも君は通はせ

(一一・二五五六)

狗上の鳥籠の山にある不知也河いさを聞かせ余が名告らすな

(一一・二七一〇)

新室を踏み静む子が手玉し鳴るも玉の如照らせる公を内にと申せ

(一一・二三五二)

禁止表現にも類例がある。

庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな

(四・五二一)

あらたまの年の経ぬれば今しはとゆめよ吾が背子吾が名告らすな

(四・五九〇)

しかしこのような敬語の使用は、先に神に対して無敬語であつたように、使わない場合もあり得たようである。東

条義門が『活語指南』の中で、いわゆる命令形を、下知・使令・希求のいずれにするか迷つてゐるが、古代にはこの活用形にまた別の受け止め方があつたのかも知れない。

五

このような諸表現と、雑歌・相聞・挽歌・譬喩歌の、万葉集の中で行われた部立てとは何か相関があるのであるか。雑歌は、各種の宮廷儀礼・行幸・饗宴などの公的要素の強い歌とされ、相聞は男女間を中心として兄弟・親族・朋友の間など個人の心情を伝える歌とされる。今、万葉集巻一から巻十四までの部立て表示を手掛りに願望・希求、疑問・反語、命令・禁止の三分類に分け、その比率を見ると次のようである。

雑歌

歌数 一四五四 願・希 一二六 八・七%

(該歌六〇五) 疑・反 三四八 二四・〇%

命・禁 一三一 九・〇%

相聞

歌数 一七三八 願・希 一二三 七・一%

(該歌七八九) 疑・反 五〇六 二九・一%

命・禁 一六〇 九・二%

集での割合の近さと意味付けてよいものであろうか。

挽歌

歌数 二一九 願・希 一〇 四・六%

(該歌一一八) 疑・反 九八 四四・八%

命・禁 一〇 四・六%

譬喩歌

歌数 一六一 願・希 一一 六・八%

(該歌七三) 疑・反 五一 三一・七%

命・禁 一一 六・八%

諸表現は一首の中に数例あるものもあり、単純に歌数を分母としてよいか問題が残るが、微かな傾向ながら、疑問表現類は雑歌より相間に少し多く、歌数は少ないが、挽歌においては更に比率が高くなっている。挽歌では命令・禁止の表現が低いこと、また願望希求の表現も少ないようである。挽歌という場のありさまを反映するように思われる。

巻一〜一四の全歌(三五七二首、防人歌を除く)に対する三分野歌の割合を示すと、

願望・希求 二七〇(七・六%)

疑問・反語 一〇〇三(二八・一%)

命令・禁止 三一二(八・七%)

となる。これは阪倉氏が戯曲について調査した、発話文の種類の統計の疑問文の割合に近い⁽⁵⁾。果たしてこの万葉

付記 右の論は五月十九日の講演会で配布した「願望・疑問・命令表現一覧」によっている。同資料についても修正・追加すべき点があるが、今は右によっておく。

注

- (1) 阪倉篤義「上代の疑問表現から」(『国語国文』二十卷十一号、『文章と表現』所収)
- (2) 宮地裕「疑問表現をめぐって」(『国語国文』二十卷七号)
- (3) 浜田敦「上代に於ける願望表現について」(『国語と国文学』二十五卷二号、同「上代に於ける希求表現について」(『国語国文』十七卷二号)
- (4) 山口佳紀「希望表現形式の成立とナ行系希望辞をめぐって」(『古代日本語文法の成立の研究』所収)
- (5) 阪倉篤義「対話―戯曲のことば」(『国語国文』昭和二十九年一月号、『文章と表現』所収。この論文には、平叙の発語一〇二回五四%、疑問問い及び反問の発語五九回三〇%、勧誘ないし命令の発語二二回一二%、応答・呼掛の発語六回三%、詠歎の発語二回一%、の数値が示されている。